

文学の言語

芦屋大学 川畑 彰

本研究発表では、アメリカ人作家リチャード・ブローティガンの短編小説、音声資料によるロバート・バーンズの詩、数篇の俳句などのテキスト例を取り上げながら、文学の言語とは何か、文学テキストがその構造の中に本来的に有する特徴とは何かについて論じた。

これらの論点の探求の端緒として、言語によるテキストに見られる文学性 (literariness) について言及した。文学性の指標として、Ronald Carter/Walter Nash が *Seeing Through Literature* (Blackwell, 1990)において挙げる 6 項目を参考とした。すなわち、①Medium Dependence ②Re-registration ③Interaction of Levels ④Polysemy ⑤ Displaced Interaction ⑥Discourse Patterning (pp.34-42)である。言語によるテキストの文学性は相対的な指標であり、言語テキストには多かれ少なかれ含まれる。文学の言語はそれ自体、独立して存在するわけではなく、また逆に完全に非・文学的なテキストというものも存在しない。

外国語教育の一環として、文学テキスト (すなわち、文学性が比較的高いテキスト) の導入を考える場合、このような言語テキストにおける文学性の相対性をよく認識する必要がある。これは、言語教育における文学テキストの有用性や意義を唱える人々、および文学テキストの言語が逸脱性を特徴とするがゆえにその教育的価値について否定的な意見を持つ人々の両者が等しく参考にすべき考えである。

また、文学テキストについての重要な特徴として独特なコミュニケーションの構造がある。すなわち、テキスト内の人物間のコミュニケーションと、テキストの創造者である作家とテキストの受容者である読者の間のコミュニケーションという、コミュニケーションの二重性である。このコミュニケーションの二重の構造から創出される人間存在についての認識の多様性は、コミュニケーションを重視する現在の言語教育の方法論に一石を投ずるはずである。

以上の点から、言語教育や外国語教育のカリキュラムの一部として、文学テキスト (再び言えば、文学性が比較的高いテキスト) が本来的に有する可能性を生かす教育を再考する気運があってもいいのではないかと、というのが発表者からの結論的なメッセージである。

本発表は同年 11 月に開催された JACET KANSAI KYOTO SEMINAR における筆者の 'A Literary Text as an Educational Foundation' と題する口頭発表のための準備段階の資料を基になされた。したがってこれら二つの発表には重複する部分があることをここに記し、併せて本研究会および同セミナーの企画実行に携われた先生方、お聴きいただいた皆様方に謝意を表したい。

(2001 年 10 月例会)